

アイデンティティとイデオロギーとしての反共主義：韓国の例を手掛かりとして

木村 幹*

はじめに

対して、第三世界におけるアメリカの政策は矛盾に満ちたものであった。アメリカは第三世界における政治と経済の発展に関心を向けている事を明らかにする一方で、反共主義を標榜する政治的指導者等を支援した。しかしながら、現実には、彼等の支配体制は権威主義的なものであり、政治や経済の近代化を実行する能力も意志も有していない事がしばしばだった¹。

冷戦期、「反共主義」は世界で猛威を振っていた。高まる東側陣営との対立の中、西側陣営の盟主であるアメリカで吹き荒れたのは、マッカーシズムだった。状況はヨーロッパでも同じであり、「鉄のカーテン演説」で知られるチャーチルは、「私は反ロシアではない、過激な反共産主義なのだ」という台詞で知られる演説を残している²。冷戦下の最前線に置かれた西ドイツでは、初代首相となったアデナウアーが西欧諸国に対しては融和的な姿勢を取る一方で、共産主義に対する強力な批判を展開し、東側諸国から「報復主義者」として批判された³。スペインやポルトガルではフランコやサラザールが自らの支配を、「反共主義」により正統化し、1970年代まで権威主義体制を維持する事となった⁴。

とはいえ、「反共主義」が真に大きな影響を持ったのは、先進国よりも、当時の発展途上国においてであった。第二次世界大戦後に相次いで独立を果たした諸国では、当初存在

* 神戸大学大学院国際協力研究科教授

した民主主義的な体制の多くが早々に崩壊、或いは変質し、権威主義体制へと移行した⁵。そして、その多くの体制が自らの在り方と、そこにおける政敵の弾圧の為に動員したレトリックが「反共主義」だった⁶。こうして、韓国や台湾、南ベトナムやインドネシアやタイ等、多くの国々において、「反共主義」を掲げる権威主義体制が成立した。民主主義の弾圧のレトリックで「反共主義」が用いられたのは、ラテンアメリカやアフリカにおいても同様だった⁷。チリのピノチェトや、アルゼンチンのビデラ等はその代表的な例として知られている。民主主義を求める運動に対する弾圧のロジックとしての「反共主義」の採用は、王政や帝政を敷いた国家にも見ることができ、その典型例は、エチオピアのハイレ・セラシエ1世やイランのパーレビ2世に見る事ができる。

言うまでもなく背景にあったのは、冷戦下における国際的緊張であり、またその中で、少しでも多くの自陣営に属する諸国を確保、維持しようとする、西側陣営の盟主、アメリカの意向だった。だからこそ、アメリカは本来自らが掲げる筈の「自由と民主主義」の理念と大きく異なる状況下にある政権に対して、時に、非民主主義的な状況の改善を求めるところか、寧ろ、積極的にこれを支援しようと試みた。そして、この場合に、アメリカと途上国政府が、便利な概念として用いたのが「反共主義」であった。即ち、これをアメリカは、自らが支援する国家や政府が西側陣営に属する事の「印」とし利用し、途上国側

の政府の側は、同じ「印」を自らへの反対勢力への弾圧を正当化する論理として利用し、その弾圧を「憎むべき共産主義者」に対する「適切な処置」として正当化した。

こうして「反共主義」は、言わば、冷戦下の国際秩序においてアメリカが、自らの側に属する発展途上国政府に与えた「免罪符」となり、それ故、後にアメリカは後にこれを批判され、自らの外交政策を変更する事を余儀なくされた。

そしてだからこそ、今日、冷戦期に大きな力を持った「反共主義」、とりわけ当時の発展途上国における権威主義政権が掲げたそれは、政権の非民主主義的な性格を糊塗する為にとりあえず掲げられた、実態を持たない空虚で滑稽なイデオロギーである、と見做されがちである⁸。しかしながら、その事はこのイデオロギーが、各国の社会状況に影響を与えなかった事を意味しない。そしてとりわけその事は、韓国や台湾の様に、「反共主義」の掛け声が、冷戦初期から80年代末までに至る、30年以上の長い期間に渡って使われた国々においてそうである。そこでは「反共教育」をはじめとする様々な「反共」イデオロギーを国民に定着させる努力が行われ、当然の事ながら、その様な国家への社会への干渉は、様々な影響を残していく事になる。

重要な事は、この様な「反共主義」の影響は、それが冷戦という大きな国際構造の中流布された結果、多くの国に幅広く見られるものである、という事である。それでは「反共主義」とは一体何であり、それは我々の住む

社会にどのような影響を与えたのだろうか。以下、筆者の主たる研究対象である韓国を中心に見てみよう。

第1章 先行研究に見る「反共主義」とアイデンティティ

本来「反共」という言葉は、その思想的特殊性により定義されるよりは、共産主義に対抗するアイデンティティを持っている時に、これを「反共」あるいは「反共主義」として定義することが望ましい。しかし、韓国現代史においては、反共という言葉の意味は、包括的な共産主義への対抗運動の総体を意味するものとしてではなく、政府主導下の一つのイデオロギーとして談論化され流布されたと見るのが妥当だろう。例えば1961年5・16軍事政変当時、「革命政府」が掲げた「革命公約」第1条は「反共を国是の第一義」とすると明らかにしている。この時に言う「反共」は、先に議論された「共産主義に対抗するすべての運動」としての「反共」を意味するものではない。ここでの「反共」という言葉は、明らかなイデオロギー的実体として大韓民国の国家基調、国民の基本素養、社会的結束力を創出した国民創出の動力源として用いられている⁹。

さて、そもそも「反共主義」とは、何なのだろうか。この点について、長い「反共主義」の時代を経験した韓国における、自国研究の中心的機関である韓国中央研究院は、上

の様にその定義を行っている。ここに表れているのは、「反共主義」という言葉の多義性であり、またそれが本来の「共産主義への反対運動」以上の意味を持つ事への当惑とも言えるものである。そして、その上でこの言葉が本来の意味を超えて、時の政権、更には国家や国民の存在意義を説明する「イデオロギー的実体」として用いられた事を指摘している。

この様な韓国の権威ある研究機関の整理は、「反共主義」を考える上で二つの大きな示唆を有している。第一は、その多義性を持つ特殊な意味である。重要なのは、その多義性が単なる曖昧性やそれによる主張の不明確さを齎すだけでなく、このイデオロギーに一つの大きな「強み」をも齎している事であろう。この点について、例えば、ディーンはその論文において、この「反共産主義」という言葉が、近年においても、本来の「共産主義に反対する」という意味を離れて、極めて広範な文脈で用いられている事、そして多くの場合、この用語がその使用者が批判する対象に対する共産主義者としてのレッテル貼りと連動して用いられ、それにより使用者の主張へ支持者を引き付ける（実質的な内容を持たない）「疑似餌」としての機能を果たしている事を指摘している。

それは即ち、次の様な状況を意味している。長らく「反共主義」が主張され、或いは一定の支持を獲得した社会では、「共産主義」という言葉はある種の人々にとって明確な否定的なニュアンスを以て受け止められるに至っ

ている。だからこそ、このような社会や人々にとっては、特定の対象に「共産主義」というレッテルを貼り付ける事は、即ち、それが批判すべきもの、更には批判して良いものである、というシグナルとして機能する事になる。だからこそ、この用語を用いる事により、言葉の使用者は自らの支持者を刺激し、自らの批判する対象への攻撃へと、人々を駆り立てる事が出来る。ディーンはその典型例として、トランプによる「共産主義」という用語の使用方法を上げている¹⁰。

そして、このようなディーンの指摘は、先の韓国学中央研究院の整理にも共通する、もう一つの、つまり二つ目の重要な内容を有している。それは、「反共主義」が時に、単に特定の対象への批判を正当化する為の、「レッテル」としての意味を超え、その支持者を一定の行動へと突き動かす、イデオロギーとしての効果を有している事である。この点について、ベピンはその著作において、アメリカの「反共十字軍」外交が、如何にインドネシアにおける軍事クーデターと、その後の大量虐殺へと、人々を誘っていったかを描写している¹¹。アカホラは、その論文でイタリアにおいて「反共主義」が、これを掲げる政治家達を共産主義に対抗する「キリスト教陣営」に属するものとして「神聖化」させる過程を描写している¹²。

とはいえ、より重要な事は、反共主義が単にその主張者への支持や、主張者が批判する対象への攻撃へと人々を誘う以上の効果を持っている、という事である。この点について、

レはアメリカにおけるベトナム人亡命者コミュニティにおいて、「反共主義」とその遺産が、彼等をベトナム本国やそこに残った人々と自らとを分けるアイデンティティとして機能している事を示している¹³。アイデンティティとしての「反共主義」の役割が指摘されているのは、他の地域においても同様である。例えば、フェングは冷戦期のタイにおいて、「反共産主義者」である事が、「アメリカ陣営に属する事」と結びつく形で人々のアイデンティティとして機能していた事を指摘している¹⁴。また、ウーは冷戦期の台湾において当時の国民党政府が「反共主義」の有無を、台湾海峡兩岸の人々を分けるアイデンティティとして用いた事、そしてその影響が後の時代にまで続いた事を指摘している¹⁵。

既に紹介したアメリカ国内のベトナム人コミュニティ同様に、イタリア人コミュニティにおいても「反共主義」が自らのアイデンティティとして機能していた事を示したのは、ルッコーニである¹⁶。他方、「反共主義」が攻撃のレトリックとして用いられる事により、反対勢力のアイデンティティを弱体化させる効果をも持つ事を主張したのは、ゴールドバーグである。彼はその論文において、「反共主義」による攻撃が、如何にしてアメリカの労働組合参加者の労働者としてのアイデンティティに影響を与えたかを詳細に論じている¹⁷。

さて、それではどのような場合に、「反共主義」はアイデンティティとして大きな機能を果たすのだろうか。この点について、重要な指摘をしているのが、クリザの論考である¹⁸。彼

女はこの論考にて、メキシコにおいて1968年にぼつ発した学生運動に対する弾圧事件が、メキシコそのものが「反共主義」にそのナショナル・アイデンティティを見出していく過程の中で、正当化されて行く様を示している。見落とされてはいけないのが、ここで「反共主義」が、単なる国内或いは国際社会におけるイデオロギー的対立軸の文脈においてのみならず、ナショナル・アイデンティティの重要な要素として位置付けられている事である。即ち、そこでの議論は次の様なものである。メキシコは反共国家であり、だから共産主義者はそのネイションの正統な一員ではない。故に彼等はメキシコネイションの「アウトサイダー」であり、排除されるのは当然なのだ、というロジックである。

それでは、この様な他国に関わる「反共主義」に関わる知見を、韓国に当てはめた時、その役割やメカニズムはどの様に整理する事が出来るだろうか。次にこの点についてやはり先行研究を用いながら、具体的に見てみる事としたい。

第2章 韓国における反共主義

韓国は台湾と並んで、第二次世界大戦終戦直後の最も早い時期から「反共主義」の影響を受けた国の一つであり、また、冷戦終焉直前の1987年に民主化されるまで、実に40年近くに渡って「反共主義」をスローガンに掲げる政権の支配下にあった国である。当然の事ながら、この国においては「反共主義」に

関わる研究の蓄積は極めて多い。本稿ではその中の主要なものを紹介し、この国の「反共主義」に関わる理解の一端を明らかにしたい。

韓国の「反共主義」に関わる研究において最も多くを占めるのは、それが韓国の民主主義の発展に与えた悪影響について論じたものである。例えば、キム・ドンチュンはその論考で、第二次世界大戦後の軍事占領以降の政策が、如何に韓国の政治に悪影響を与えたかを論じている。即ち、そこではアメリカが広めた「反共主義」が、本来植民地支配の終焉以後、排除されるべきであった日本の植民地支配に協力した勢力、即ち、「親日派」の流れを引く人々に自らの存在理由を提供し、彼等をして独立後の韓国の支配勢力へと浮上させた過程が示されている¹⁹。

この様に「反共主義」に関わる問題を、脱植民地化と絡めて議論する傾向は、韓国の多くの論者に共通している。そして、これらの研究の多くにまた共通しているのは、第二次世界大戦後の米ソ両国による分断占領や、その強圧的な支配等、韓国の状況の特殊性が強調される事である。例えば、シン・カンヨンはその論考において、アメリカの占領政策が日韓両国において異なった事を指摘している。即ち、日本では民主化を促進する方向に進んだアメリカの占領政策が、逆に韓国では民主化を阻害する方向に進んだ事を指摘し、その結果として親日派勢力による「反共主義」体制が成立した、とするのである²⁰。

とはいえ、これとは異なる形で「反共主義」が今日の韓国に与えている影響を論じようと

する論者も存在する。例えばオ・イルファンは、韓国の「反共主義」をナショナル・アイデンティティの形成過程との関係で論じようと試みている²¹。即ち、一国のナショナル・アイデンティティは、何らの前提もなしに存在するのではない。それは各地域の人々の共通の歴史的経験により生じるものである。そして彼は言う。今日の韓国人のナショナル・アイデンティティは、日本による植民地支配と、その後の南北分断により規定されている。重要なのは、「エスニック・アイデンティティ」と「ナショナル・アイデンティティ」が異なる事であり、とりわけ韓国と他国を分かつのは、同じ民族が南北に分断され二つの国家が生まれた事である。そして彼はこう結論付ける。韓国は分断国家として生まれたからこそ、「反共主義」の洗礼を受けた。しかし、その「反共主義」こそが、後に韓国の人々が「民主主義」にアイデンティティを見出す一つの原因になったのだ、と。こうしてここからオ・イルファンは、分断国家としての韓国の特殊性を基盤に、韓国のナショナル・アイデンティティの特殊性を説明し、今日の政治状況との連結を試みる事となる。彼はこれにより「反共主義」が民主化を阻害した、という多くの論者に対し、「反共主義」が民主化を促進する要素として機能した可能性を指摘する²²。

しかしながら、ここでより重要なのは、この様なオ・イルファンの議論の前提からは、韓国の経験の「特殊性」のみならず、「普遍性」を議論する事が可能な事である。何故なら、第二次世界大戦後の世界において、脱植民地

化とそれに伴うナショナル・アイデンティティの構築は、多くの国が共通して抱えた課題だったからである。そして、ここにおいて重要なのは、このナショナル・アイデンティティの形成期における「反共主義」の隆盛が、当然の事ながら、この時期に形成されるナショナル・アイデンティティに影響を与えた事である。

それは再びオ・イルファンの議論に立ち戻って考えるなら次の様になる。彼は、韓国の経験の特殊性を、一つの民族が二つの国家に分断され、この二つの国家が対抗する中で、「韓国としての」ナショナル・アイデンティティが構築されなければならなかった事であったとする。彼がエスニック・アイデンティティとナショナル・アイデンティティの違いに注目するのはその為であり、前者が「朝鮮民族／韓民族」としての一つのアイデンティティであるとすれば、後者は「朝鮮民主主義人民共和国国民」と「大韓民国国民」としての二つのアイデンティティである、という事になる。そして、その両者を分ける為に用いられたのが、「共産主義／反共産主義」であった、という事になるのであろう。

とはいえ、我々が想起しなければならないのは、この様な状況は韓国においてのみ存在した訳ではない、という事である。明らかなのは、他の分断国家の事例であろう。既に先行研究において紹介した様に、韓国と同じく分断国家であった台湾や南ベトナム、更にはその遺民とも言える亡命者のアイデンティティにおいて、反共主義は一定の役割を果たし

ている。理由は恐らく簡単である。韓国や台湾、南ベトナムの人々にとって、自らと北朝鮮、中華人民共和国、そして北ベトナム（ベトナム人亡命者にとっては、統一後のベトナム）の下にある人々と自らを分かち指標として「反共主義」は最も簡単なものであったからである。加えて、これらの国家の下にある人々には、同時に「将来の統一に向けたイデオロギー」も与えられねばならず、それを例えば文化的或いは歴史的な経験の違いに由来する「異なるエスニシティ」に求める事はできなかったからである。

しかしながら、同じ様な状況は、民族の分断を経験しなかった国々については存在しなかった。先行研究で紹介したタイやインドネシア、更にはメキシコの事例は、それを典型的に示している。重要なのは、そもそも多くの社会では、「ネーション」と「エスニシティ」の関連自体が不明確である、という事である。例えば、タイにおけるアイデンティティとしての「反共主義」の重要化は、この国の人々が国王の下にある「臣民」の立場を脱して、「国民」へと転化する際の一つの契機となったかもしれない。インドネシアにおける「反共主義」の高まりが、中国系住民の排除と連動している事は明らかであり、そこにはメキシコで見られた様な、「反共主義」を利用したネーションの「アウトサイダー」を再定義する過程を典型的に見ることができる。

更に言えば、ナショナル・アイデンティティは決して固定的なものではなく、国内的更には国際的な状況の中揺れ動くものである。

例えば、西ドイツやイタリアにおける「反共主義」の隆盛は、第二次世界大戦時に失った国際社会での地位を回復する為に必要なものであり、その為のロジックとして動員されている。アメリカ国内における左右両派の「反共主義」を巡る葛藤は、第二次世界大戦後のアメリカにおける、彼等のアイデンティティの中核となる「自由と民主主義」の内容を巡る葛藤の表れであり、それ故に大きな影響を持つ事となったと整理することができる。

それではその様な特殊性と普遍性を同時に併せ持つ、韓国の反共主義の実情はどの様なものだったのであろうか。以下、具体的な資料により見てみる事としたい。

第3章 国際社会における位置づけとしての「反共主義」

まず、現実の「反共主義」が韓国においてどの様なものであったかを見る為に、メディア上での言説を見てみよう。ここでは植民地期からの長い歴史を持ち、今日でも韓国最大の発行部数を誇る朝鮮日報の記事を利用してその一端を明らかにしてみたい。

表1は朝鮮半島が日本の植民地支配から解放された1945年8月から、長い権威主義体制期を経て韓国が民主化を果たす1987年6月までの期間における、朝鮮日報の記事の中から、その表題に「反共」という語を含むか、或いは朝鮮日報社が「反共」をキーワードに設定している記事、全2647件の表題にどの様な語が含まれるかを、示したものである。

表1：朝鮮日報記事のタイトルに見る「反共」
関連記事の頻出語句

(1945年8月～1987年6月)

普通名詞		固有名詞	
反共	2097	北朝鮮	174
大会	402	韓国	148
青年	243	アメリカ	109
連盟	168	アジア	100
代表	148	日本	65
大統領	133	ソウル	62
蹶起	118	中国	54
糾弾	118	ソ連	73
公報	106	インド	51
自由	99	フィリピン	36
会議	94	ラオス	35
世界	90	タイ	30
釈放	88	東南アジア	29
学生	81	国際連合	25
捕虜	75	ハンガリー	21

出典：조선일보「지면보기」、http://archive.chosun.com/pdf/i_service/index_new_s.jsp (最終確認 2022年8月12日)、より筆者作成。

この表を一見してわかるのは、この新聞における「反共」関連記事が、単に対立関係にある北朝鮮を対象とするのみならず、広く、世界の国々の動きをカバーするものになっている事である。とりわけ、アジア諸国に関わる記事は多く、インドと東南アジア諸国の関連の動きをも合わせたアジア諸国に関する言及の総数は、北朝鮮やアメリカに関わる記事の数を大きく上回る事になっている。

この様な冷戦下における朝鮮日報の記事の特徴は、更に狭く「反共主義」に関わるものに絞ると明確になる。記事の表題に「反共主義」という語を含む記事は全16件、そのうち韓国国内における「反共主義」に関わる記

事2件を除く、14件の記事は全て、韓国国外における「反共主義者」を紹介するものとなっている。例えば、1968年11月23日、同紙はアメリカの神学者、ウィリアム・マックバーニー (William McBurney²³) の韓国来訪を、「世界的反共主義者マックバーニー博士来韓、『韓国人の勇気から学ばねば』と力説」という表題の下、次の様に伝えている。

彼は空港にて「最近共産主義者達は世界各地で自由世界を挑発し続けている」と述べ、「韓国の1・21事態や蔚珍共産党スパイ浸透事件はその正体を良く表したものである。自由人として、力によってのみ彼等を排除できるのだ、という教訓を再び学ばせてくれた」と、力説した²⁴。

明らかな事は、これらの韓国国外における反共主義者や「反共主義」に関わる言説が等しく、「韓国こそが国際社会において反共主義の先頭に立っている」という主張を有していた事である。冷戦下の世界において、ソ連や中国をはじめとした東側諸国との交渉を持つ事が出来ず、国連への加盟すら叶わなかった当時の韓国にとって、世界各地における「反共主義」の旗の下での活動は、韓国が決して国際社会で孤立した存在ではなく、寧ろ、そのあるべき世界での最先端にいる事を確認させる効果を持っていた。

そして、この様な「世界の中の韓国」の位置を確認させる動きは、この国において、一つの大きな動きを生み出す事となる。即ち、

1966年の世界反共連盟（World Anti-Communist League）の結成である²⁵。

周知の様に、この世界反共連盟は、嘗て李承晩政権が、同じく「反共主義政権」として知られた台湾の蒋介石政権及びフィリピンのキリノ政権（後にマグサイサイ政権）との共助の下にしたアジア反共連盟（Asian Peoples' Anti-Communist League）を土台に、これを改組して設立されたものであり、このアジア反共連盟の設立式は、1954年6月、韓国最大の軍港である鎮海で行われている。だから、この「反共主義」の世界組織について、そもそもの出発点から韓国はこれに深く関わっている事になる²⁶。そこに朝鮮戦争休戦直後の困難な国際状況を、同じく「反共主義」を掲げる国家との連携により、乗り切ろうとする李承晩政権の意志がある事は明確だった²⁷。

とはいえ、この様な韓国社会にとっての「反共主義」国際組織の存在意義は、その後確実に低下していった。表2はやはり『朝鮮日報』において、「反共主義」国際組織及びその韓国内における下部機関を構成する「韓国反共連盟」に関わる報道の推移をまとめたものである。1954年のアジア反共連盟の結成を前後する時期において活発に行われていた報道が、1960年代後半に入ると急速に減少し、1980年代には依然として公にはこの国家は「反共主義」を掲げる全斗煥政権の下にあったものの、「反共主義」国際組織への関心が失われている事がわかる。

表2：「反共連盟」に関わる新聞記事の推移

期間	記事数
1950-54	62
1955-59	192
1960-64	145
1965-69	54
1970-74	23
1975-79	25
1980-84	6
1985-89	5

出典：조선일보「지면보기」, http://archive.chosun.com/pdf/i_service/index_new_s.jsp（最終確認2022年8月12日）、より筆者作成。

明らかなのは、韓国にとっては「反共主義」が、単に自らの体制とその在り方を正統化する、政権にとっての「都合の良いロジック」だっただけではなく、国際的な孤立を深める中、他の同様の立場にあった国々との関係を構築する為の「国際社会への窓」でもあった事である。だからこそ、当時の韓国メディアは繰り返し、世界にも多くの反共主義者やその政権があり、韓国と共に共産主義と戦っているのだ、というメッセージを伝える事となった。

それでは、この様な韓国の反共主義は、その国内においてはどの様なものとして現れたのだろうか。次にその言説の内容に踏み込んでみる事としたい。

第4章 北朝鮮批判としての反共主義

「反共主義」は冷戦下の韓国において重要なイデオロギーの地位を占めていた。だからこそ当然の事ながら、その結果、教育課程に

においても「反共主義」的要素が多々見られる様になった。それは当時の韓国が国家として、反共主義を如何に考え、その要点が何であったかを我々に教えてくれることとなる。

この韓国における「反共主義」が教育にどの様に反映され、人々の意識にどう影響したかについては、今日まで多くの研究があり、その全体像については、これらの優れた先行研究に譲る事としたい²⁸。そこで本稿では、この「反共主義」教育の内容とロジックを中心に簡単に確認したいと思う。

そもそも「反共主義」を教育する、とは如何なる事であろうか。まずこの点を明らかにする為に、「反共主義」教育が本格化する1950年代の状況について見てみよう。この時期の「反共主義」教育の最大の特徴は、それが単独の科目として展開されたのではなく、国語、道徳、社会等の科目の要素として位置付けられた事である。そこで目標とされたのは、教育課程の全てに「反共主義」理念を浸透させる事に他ならなかった²⁹。

それ故、この時期、「反共主義」に関わる教育資料は、「教科書」として位置付けられるのではなく、「読本」つまり、参考文献として扱われた。そしてその様な「反共主義」に関わる「読本」の代表例が、朝鮮戦争直後の1954年に、韓国教育文化協会が発行し、韓国文教部（日本の文科省に相当）が推薦図書とした『反共読本』である³⁰。この小学校の学年数に合わせて全6巻に及んだ書籍の章立ては、表3の様になっている。

さて、これらの内容を一目して明らかにな

る事がある。それはこの一連の「読本」では、本来なら「反共主義」の原点である筈の、「共産主義」が如何なるものであるかについて、殆ど何も語られていない事である。例えば、その思想的始祖とも言える、マルクスの名前やその著作である『資本論』はこの「読本」には登場しない。つまり、この「読本」を読んでも、「共産主義」が何であり、何故に人々がこれと戦わなければいけないのかについての、イデオロギー的、或いは思想的説明は、何も学べない構造になっている。

他方、「読本」で語られるのは大きく分けて、三つの要素である。一つはこの「読本」が発行される直前まで繰り返されてきた朝鮮戦争そのものに関わる描写であり、「読本」の内容の過半はこの関連の記述で占められている。そして、この朝鮮戦争に関わる描写は更に大きく二つに分ける事ができる。第一はそこにおける、国軍、つまりは韓国軍の苦闘の様子である。この部分における特徴は、この戦争が苦難に満ちたものであった事が強調されている事であり、「勇ましく戦う国軍」の姿は背景に留まる事となっている。しかしながら、より多くを占めるのは、第二の民間人の戦禍、つまりは戦争そのものの被害の記憶である。朝鮮戦争に関わる「物語」において、勝利や成功を中心に記述するのではなく、苦難と悲惨さを強調するのは、この「読本」の大きな特徴の一つとなっている。

「読本」で語られる二つ目の要素は、共産主義が人々の生活に及ぼす影響であり、その柱は二つある。一つは、朝鮮戦争時における

表3：『反共読本』の章立て

第1巻	<ol style="list-style-type: none"> 1. 光復節 2. 楽しい国 3. 共産党は悪だ 4. 38度線を越えてきた福男 5. 以北の話 6. 6.25 事変 7. スナムの父 8. 勇敢な我が国軍 9. 避難生活 10. 帰ってきた姉 11. 以北を抜け出した盧大尉 12. 勇敢に戦った金少尉 	第4巻	第一部 浸透する共産主義 <ol style="list-style-type: none"> 1. 6月25日 2. 国軍は戦ったものの 3. 戦車のない国軍の悲しみ 4. 後日を約束した国軍 5. 苦悩の日記 6. 共産主義者は人間を蠅にする 7. 略奪する共産主義者 第二部 共産主義と戦う人達 <ol style="list-style-type: none"> 8. 徒手空拳で 9. 白岩山の盾
第2巻	<ol style="list-style-type: none"> 1. 傀儡軍の奇襲 2. 避難の途 3. 平壤を訪れた日 4. 以北からやってきたミヨンス 5. オランケを捕まえたミヨンス 6. 傀儡軍と戦った若者 7. 防空壕の中のつらい日々 8. いつも空腹の北朝鮮労働者 9. 殺されたおじさん 10. 解放された捕虜たち 11. 赤いスパイ 	第5巻	第一部 侵略する共産主義 <ol style="list-style-type: none"> 1. 苦難の90日の日記 2. 東海から白頭山まで 3. 拉致された両親を思いながら 第二部 自由を求めて <ol style="list-style-type: none"> 4. 鉄のカーテン 5. 自由を求める人々 6. 自由を求めてきた汽車 7. 自由への門 第三部 反共の灯 <ol style="list-style-type: none"> 8. グアテマラの反共軍 9. 偉大なる反共指導者
第3巻	第一部 戦争の巧みな共産主義者 <ol style="list-style-type: none"> 1. 6月25日 2. 残って戦った国軍兵士 3. 傀儡軍の支配した日々 第二部 戦う大韓民国 <ol style="list-style-type: none"> 4. ジェット機を待つ心 5. 入隊した兄 6. 国土統一の歌 7. 避難の道 8. 燃える飛行機と共に 9. 戦友の歌 10. 反共統一の歌 第三部 貧しい共産主義者と豊かな我が国 <ol style="list-style-type: none"> 11. 板門店からの手紙 	第6巻	第一部 共産世界の姿 <ol style="list-style-type: none"> 1. 共産主義に対する問いと答え 2. 北朝鮮の実情 3. 凍える家族 第二部 反共の烽火 <ol style="list-style-type: none"> 4. 中共撃滅の歌 5. 自らの故郷を爆撃して 6. 臨津江と家族の後継者 第三部 自由を求めて <ol style="list-style-type: none"> 7. ミグ飛行機で脱出したフランク中尉 第四部 真の解放とは <ol style="list-style-type: none"> 8. 民族の念願

出典：박형준 「전후 『반공독본』의 체계모니 전략과 사회문화적 함의」 『한국문학논총』 79, 2018年, pp. 463より筆者作成。表題は一部意識している。

韓国での北朝鮮支配の一時的な支配の経験であり、もう一つは、北朝鮮における人々の生活である。それにより如何に「パルゲンイ」(共産主義者の意味の蔑視語。以下、「共産主義者」³¹⁾が人々を苦しめる存在であり、その支配下での生活が如何に悲惨なものであるかを示し、併せて、その様な「共産主義者」の支

配下にある北朝鮮よりも、「自由主義」の下にある韓国の生活が幸せなものであるか、が強調される事になっている。

「読本」の三つ目の要素は、国際社会の動きであり、冷戦下の世界の様子やそこにおける反共主義の動きを伝える内容になっている。ここで、この「読本」が出されたのが、

先に紹介したアジア反共連盟が結成されたのと同じ年である事を指摘するのは重要であるが、同時に「読本」で紹介される世界の「反共主義」の事例がアジアよりも寧ろ、欧州に力点を置いている事も見逃されてはならない。

「読本」は全体として、低学年を対象にするものが、子供の目線に近い朝鮮戦争に関わる直接的な記憶、即ち第一の要素を中心とするものであるのに対し、学年が上がるに連れて、第二の要素、更には第三の要素を含むものへと進む構造になっている。

進んで、この「読本」における叙述の特徴についても見てみよう。既に述べた様に、この「読本」の最大の特徴は、それが本来批判すべき対象である「共産主義」が何であるか、に関わる内容をほぼ全く有していない一方で、それが齎す否定的な結果については繰り返し強調している事である。

では、この様な特色を持つ「読本」において、「共産主義」が否定的な結果を齎す理由は、どの様に説明されているのであろうか。結論から言うなら、両者を繋いでいるのは「共産主義者」の存在である。即ち、この「読本」で繰り返し強調されるのは、「共産主義者」とは他人から財産を奪い、自由を抑圧し、更には戦争を起し平気で人を殺害する「悪い人」である、という事である。つまり、「共産主義」が否定的な結果を齎すという説明ではなく、そもそもが「悪い人」である「共産主義者」が否定的な結果を齎す、という属人的な説明になっている。

では、何故にこの「読本」の内容はこの様な構造になっているのであろうか。その理由は「読本」の冒頭に書かれている「教授指南」つまり、教育要領により明らかになる。「教育指南」はこの「読本」の目的について次の様に述べている。

1. 共産主義は我が国の建国理念と民族の伝統を無慈悲に破壊する、我が民族の精神に反するものであり、故に俱戴天の敵である事を明確に理解させる。
2. 民主主義の根本精神を明確に把握させるとともに、侵略に邁進する共産主義を徹底的に排撃する。朝鮮戦争の原因を徹底的に明かし、滅共生活の必要性を知らしめる。
3. 休戦ラインにより南北が分断されている現実と、常に共産主義者による侵略の危険性がある事を明らかにし、覚悟を新たにさせる。
4. 民主経済の優秀性と民主主義発展方法の卓越性を理解させ、唯物論的であり、常に破壊的であり、また非平和的な邪悪なる革命に邁進する共産主義を徹底的に批判するように指導する。
5. 唯物論を信奉する共産主義を排斥し、併せて人間への尊厳を基礎にする民主主義精神を明確に体現させる。
6. 以上の内容を指導生活の基礎に置き、学習問題として更に発展させることが期待される³²。

重要な事は、これらの項目が何れも、共産主義の内容やその論理よりも、その悪影響について語っている事である。言い換えるなら、そこには何故に共産主義がこれらの悪弊を持つのかを説明する事よりも、とにかく共産主義は危険な存在であり、これへの警戒をしなければならぬ事を、知らしめる事に重きが置かれている。簡単に言えば、そこでは理屈の説明は求められておらず、ただその悲惨な結果の提示だけが求められている、と言える。

「反共主義」と名乗りながら、共産主義そのものについては、殆ど何も語る事はなく、ただそれが齎す結果とそれが否定的な影響を批判する事に終始する。この様な李承晩政権期の「反共主義」の傾向は、その後の韓国の政権にも受け継がれた。

例えば、本稿でも紹介した多くの先行研究では、韓国における「反共主義」は、李承晩政権期の素朴な共産主義批判から、朴正熙政権においては、共産主義に勝利する為の「勝共」理論へと発展した、と整理される。確かに朴正熙等は軍事クーデタの正統化理念に「反共主義」を据え、教育課程においても中心的なイデオロギーとして位置付けた。とはいえ、その事は朴正熙政権において批判の対象である共産主義の内容が詳細に分析され、否定的な影響を齎す理由が、論理的且つ説得的に人々の前に提示された事を意味しない。

寧ろ、朴正熙政権による「勝共理論」で強調されたのは、その思想的内容の説明ではなく、とにかく「共産主義」が脅威であり、打倒すべき対象である、という事であった。即

ち、「勝共理論」理論とは、李承晩政権期の「共産主義」の脅威を強調する「受動的」な反共主義を、これに打ち勝ち、打倒する事を目指す、「能動的」なものへと移行させたものに過ぎなかった。

だからこそ、そこにおいて重視されたのは、理論よりも寧ろ実践であり、その為の知識の習得であった。その点は、例えば、1972年、共産圏問題研究所が出版したその名も『勝共啓蒙資料集』と言う大部の二巻本に典型的に表れている³³。そこでは「勝共」の為に理論的に必要だと思われる、共産主義とは如何なるものであり何故脅威なのかを説明する「資料」は存在せず、並んでいるのは全て北朝鮮の実態を示す資料である。背景に存在するのは、「勝共」理論を具体的に実践する為には、抽象的な理論的整理よりも、まずは具体的な打倒対象である北朝鮮の状況を知る事が肝要である、という理解である³⁴。

この様な朴正熙政権以降における「勝共」理論の実態は、メディア等の言説においても同じであった。この様な朴正熙政権以降の「反共主義」の特徴の一つは、自主国防の重要性により大きな価値が置かれるようになり、軍事力の充実こそが「勝共」の道である事が強調されるようになった事である。デタントの進展により国際的な孤立が深まる中、嘗ては重要であったアジアや世界の「反共主義」による国際関係の重要は急速に低下していく事になる。結果、表4に見られる様に、アジアや世界の「反共主義」的連帯に関わる記事は減少し、代わって北朝鮮に対する蔑称である

表4：『朝鮮日報』に見る「反共」関連記事の頻出後推移

朝鮮戦争以前	朝鮮戦争期	李承晩政権後期	第二共和国	第三共和国	第四共和国	第五共和国
大会	釈放	大会	大会	大会	大会	大会
闘争	捕虜	青年	青年	連盟	北傀	北傀
援助	公報	代表	空軍	糾弾	蹶起	公開
極東	青年	大統領	反対	北傀	糾弾	糾弾
大統領	单身	公報	法案	総会	違反	世界
会議	ドイツ	闘争	特別法	違反	連盟	一般
結成	収容所	会議	闘争	自由	蛮行	蹶起
計画	市民	連盟	幹部	代表	世界	連盟
長官	委員会	釈放	代表	センター	総会	教育
強化	地方	捕虜	会議	拘束	安保	公演

出典：조선일보「지면보기」、http://archive.chosun.com/pdf/i_service/index_new_s.jsp（最終確認2022年8月12日）、より筆者作成。それぞれの時期は、便宜的に、朝鮮戦争以前が1945年8月15日から1950年6月24日、朝鮮戦争期は1950年6月25日から1953年7月29日、李承晩政権後期が1953年7月30日から1960年4月18日、第二共和国期が1960年4月19日から1961年5月15日、第三共和国期（軍政期を含む）が1961年5月16日から1972年10月16日、第4共和国期が1972年10月17日から1979年10月25日、そして、最後の第5共和国期が1979年10月26日から1987年6月29日となっている。必ずしも政治体制そのものの公式的な時期とは同じになっていない事に注意³⁵。

「北傀」という語句が頻発し、その「糾弾」が叫ばれるようになっていく。ここでも再び、抽象的な内容よりも具体的な敵との対決がクローズアップされている事になる。

ここからわかる事は、結局最後まで、韓国における「反共主義」が独自の論理を持たず、最終的には単なる北朝鮮を批判し、打倒する為のロジックへと集約されて行った事である。こうして韓国の反共教育は、何時しか脅威に備える為に北朝鮮を知る為のものへと置き換えられ、民主化後には「統一教育」と名を変えて生き延びる事に成功する³⁶。

それでは、この様な実態を持つ韓国の「反共主義」は人々やその社会にどの様な影響を与えたのであろうか。最後にこの点について述べて、本稿を終える事としたい。

むすびにかえて：アイデンティティとしての反共主義

ソジョンミンは反共ポスターがなんなのかわらないようだね。なぜ北朝鮮傀儡徒党をこんなにきれいに描くのだろう。またこの色はなんなのだ。学校に通うことができなくて、まったく勉強ができてないんだな。みんな、自分が描いたポスターをもう一度見てみましょう。ソジョンミンのように反共ポスターを描くのはダメだよ。わかった？ さあ、まだすこし時間があるから、ソジョンミンは新しい画用紙に描き直してみよう。いいかい、北朝鮮の傀儡はオオカミの群れのように描くんだよ、先生の言ってることわかる？³⁷

韓国の「反共主義」は結局、独自のロジックを持つ事が出来ず、自らと対立する北朝鮮

の脅威を叫ぶ相対的に単純な主張へと帰着していった。その事は即ち、この国の「反共主義」がその名とは異なり「共産主義」に対抗するに十分な理論的説明を遂に持ちえなかった事を意味していた。

そしてだからこそ、そこにおける批判の憎悪や批判は、イデオロギーとしての「共産主義」よりも、寧ろ、これを奉じる「共産主義者」に対して向けられねばならなかった。そして、その為には韓国の「反共主義」における「共産主義者」の姿は、飽くまで残虐で非人道的、つまりは悪魔の様な存在として、描かれる事になる。例えば、本章冒頭の文章は、当時の教育現場における一人の教員の言葉について、ある論者が書き残したものである。この論者は加えて、この様な当時の反共教育が、「反共つまり北朝鮮に対する不信と共産主義に対する警戒や懸念」や「拭いがたい感情的な『トラウマ』」として、今日まで残存し、作用していると指摘している。

しかしながら、そこには大きな矛盾もまた存在した。何故なら、1948年の成立以降の韓国は、自由主義陣営の一員としてのアイデンティティと同時に、強い民族主義をも奉じる国家であったからである。そして仮に民族主義のロジックに従い、北朝鮮の人々もまた「同朋」であり、実現すべき民族統一の対象であるならば、その対象を「悪魔化³⁸」し排除する事は不可能になる。

だからこそ、韓国の「反共主義」は一つのロジックを用意した。即ち、共産主義者は民族の敵であり、その支配の下にいる人々はそ

の単なる犠牲者に過ぎない。民族の伝統を犯し、これを破壊する人々は統一の対象ではなく、そこから排除されるべき人々である。だからこそ彼らの存在は、自らとは全く性格を異にする存在として、「悪魔化」され、「オオカミの群れ」の様にかかれなければならなかった。

そしてその議論はちょうど、植民地支配からの解放直後の日本の支配への協力者、つまりは「親日派」を巡る議論と平行なものであった。結局問題はこうである。ネイションの利益に反して行動し、或いは行動した人々は、ネイションの一員から排除されるべきなのか。その疑問点を有する点において、反植民地主義としての民族主義は、「反共主義」と同根の問題を抱えていた、という事が出来る。

そして、独立を遂げた韓国は南北分断と朝鮮戦争の勃発を経て、反植民地主義としての民族主義の色彩を曖昧にし、嘗ての「親日派」の多くをネイションの中に許容していく一方で、「共産主義」を掲げる人々を自らのネイションの範疇から排除していく事となった。

そしてその事は、大きな単一のエスニティを有し、国民国家の形成に苦労しないかに見えた韓国にも、「ネイション」とは何かを巡る葛藤が存在した事を意味していた。朝鮮半島の南北分断と朝鮮戦争の勃発により現実となった北朝鮮の「現在の」脅威は、その時点での韓国の人々をして、自らと「共産主義者」との間の一線を引く事を余儀なくさせた。「親日派」を巡る問題が紆余曲折を経た挙句

に曖昧に処理されたのに対し、「共産主義者」が「悪魔化」され、排除されたのは、最終的には両者の脅威の現実的な大きさの違いによるものだった、と理解する事ができる。

だからこそ、冷戦下の韓国において、ネイションの一員である為には、人々は自らが「反共主義」者である事を必要とし、「反共主義」者である事を示すには、「共産主義」との戦いに実際に従事している事を示さねばならなかった。言葉を換えて言うなら、冷戦下の韓国において人々は、生まれながらにしてそのネイションの一員である訳ではなかった。寧ろ彼等は「反共主義」を受け入れる事により、初めてネイションの一員となる事が出来たのであり、逆に一旦何らかの理由により「共産主義者」としてのレッテルを張られれば、「民族の敵」として、容易にネイションから排除される事となった。

それ故に、冷戦下の韓国において、「反共主義」者である事は、人々のアイデンティティを構成する重要な要素であり、人々はそれを誇示する事により、自らのネイションの一員としての存在を正統化する事が出来た。後に軍事クーデタを起こし、自ら大統領の地位に就任した全斗煥は、中学生時代の自らの経験を以下の様に回想している。

しかし、私の希望とは異なり、学校の雰囲気は勉強に相応しいものとは言えなかった。解放政局の混乱の結果、一中学校に過ぎない我が学校にも左翼分子達による扇動と暴力が頻発した。理念や政治体制に敏感ではない学

生達はその様な学校の雰囲気に失望と憤怒を憶えざるを得なかった。それは私自身も同じだった。一部教師と上級生の中から飛び出す、授業ボイコットや反動教師の追放といった過激な扇動の言葉に、学生達は混乱した。

そんなある日、左翼系列の責任者が化学の授業中に乱入し、授業のボイコットを呼びかけた事があった。教室の外には左翼系列の上級生幹部10余名がゲバ棒を持って立っており、険悪な雰囲気が流れていた。一部の学生が早く教室の外に逃げ出し、残る学生も恐怖心でただ息を殺していた。私はその状況に怒りを覚え、机を叩いて立ち上がり、左翼系列の上級生幹部に顔を向けて、こう声を挙げた。「俺たちの両親は苦勞して学費を準備して、勉強をさせてくれているのに、勉強をしないなんて言う事があっていいものか。俺が責任を取るからお前らは安心して勉強しろ！」²⁹

全斗煥が幼少年期を過ごした大邱は「韓国のモスクワ³⁰」との異名を取った、朝鮮半島で最も左翼勢力の活動が活発な地域であり、未だアメリカ軍の占領下にあった1946年10月には、「大邱10月抗争」と呼ばれた左翼勢力の大規模な運動と、それを抑圧しようとする米軍政府との間の大規模な衝突事件が起こっている³¹。そして、この大邱はやがて朝鮮戦争が勃発すると、38度線を突破して南進する北朝鮮軍と釜山に臨時首都を移して抵抗する韓国軍の最前線となる事となる。

こうした朝鮮半島を二分する左右対立が典型的に展開される環境の中、全斗煥は「共産主義者」との出会いの中で、自らが彼等と異なる意見を持つ、つまりは「反共主義者」としてのアイデンティティを獲得する事となる。そして、このアイデンティティの獲得は、彼にとって重要な意味を有していた。慶尚南道のとある農村に生まれた彼の家は、日本統治下において父親が満洲への進出に失敗し、その経済的基盤を全て失った状況にあった。両親や祖父母、更には親族には、独立運動に関わる経歴はなく、それに伴うアイデンティティを獲得する事も不可能だった。後に彼自身が率直に回顧した様に、全斗煥は勉学において突出した才能を有しておらず、学校の成績は平凡であった⁴²。

だからこそ、その様な彼にとって「反共主義」への目覚めと、「反共主義者」としてのアイデンティティは何物にも代えがたいものだった。そしてその後朝鮮戦争が勃発すると、彼は陸軍士官学校へ入学、職業軍人への道を歩む事になる。そしてそこで彼のアイデンティティはもう一段の飛躍を遂げる。軍人として有能である為には、勉学への才能と併せて、強靱な体力とその体力を生かした「実践」が必要であり、そこに彼は自らの存在意義を見出したからである。朝鮮戦争後の「反共主義」の隆盛は、「反共主義者」である事を自認する全斗煥をしてエリート街道へと押し上げた。こうして「反共主義」の実践者としてのアイデンティティを獲得した彼は、やがてそのアイデンティティに沿って行動し、自身を

大統領の地位にまで押し上げていく事になる。民主主義に反するクーデタも、民主化運動を弾圧した光州事件も、彼にとっては「反共主義」の実践の一過程だと認識されていた⁴³。

全斗煥の生涯と、その歴史的な位置づけについては、別稿で議論する予定であり、その内容をここで詳述するのはやめておこう⁴⁴。しかしながら明らかなのは、全斗煥やその体制もまた、南北分断状況に置かれた韓国の「反共主義」が生み出した一つの結果だという事である。そして、その事は先行研究においてタイやメキシコで見た様に、韓国においても「反共主義」が、単に政権とその在り方を正統化するだけのお手盛りのロジックであっただけでなく、より大きく人々の人生を作用する、ナショナル・アイデンティティの一部として機能していた事を意味している。

しかしながら、全斗煥が政権を獲得した1980年代は、既に世界が冷戦の終焉へと向かう時期に当たっており、彼等が打ち立てた政権の在り方は、当時の国際状況に合致しないものとなっていた。第二次世界大戦終了から冷戦終焉まで僅か45年。「反共主義」が全盛を振るった時代は、一つの世代を生み出すには十分な長さがあっても、彼等が社会の中核に上り詰めた後でも、その生命を維持するには短すぎる期間しか有さなかった。だからこそ、「反共主義の子」等が作り上げた政権は、大規模な民主化運動に直面する。「反共主義」がアイデンティティとして機能し得る時代は終わり、新しい「民主化の第三の波」が訪れ

る時代になっていた。

こうして「反共主義」の時代は終わり、「反共主義の子」等は石もて政権を追われることになる。「反共主義」、それは第二次世界大戦の終焉が齎した二つの大きな世界的出来事、即ち、冷戦的秩序と旧植民地諸国の独立が齎した、鬼子とも言える存在だった。そしてだからこそ、「反共主義」は第二次世界大戦後終わり半世紀近くを経る事により、一旦その影響力を後退させる事となった。その事を確認して本稿の筆を擱く事としたい。

注

- 1 Osita G. Afoaku, "U.S. Foreign Policy and Authoritarian Regimes: Change and Continuity in International Clientelism," *Journal of Third World Studies*, FALL, 2000, 17 (2), p.14.
- 2 Winston Churchill, "Winston Churchill - I'm not Anti-Russian. I'm violently Anti-Communist - June 1954," <https://www.youtube.com/watch?v=SukZgcMeU-c> (最終確認 2022年8月15日)。
- 3 西ドイツの反共主義については、近藤潤三「戦後史のなかの反ファシズムと反共主義：日独比較の視点から」、『愛知大学法学部法経論集』205、2016年、pp.111-182。
- 4 Benny Pollack and Jim Taylor, "The Transition to Democracy in Portugal and Spain," *British Journal of Political Science*, 13(2), Apr., 1983, pp. 209-242.
- 5 この点については、今日まで多くの研究が積み重ねられてきた。例えば、粕谷祐子『アジアの脱植民地化と体制変動：民主制と独裁の歴史的起源』（白水社、2022年）。Rudol Fon Albertini, *Decolonization: The Administration and Future of the Colonies* (Doubleday & Company INC, 1971)、等。
- 6 例えば、内田智大「アジア諸国における権威主義開発体制と人権問題」、『人権教育思想研究』12、2009年3月、pp. 2-21。
- 7 ラテンアメリカについては、Nick Fischer, *Spider Web: The Birth of American Anticommunism* (University of Illinois Press, 2016)。アフリカについては、差し当たり Altmetric Miscellany, "'Anti-Communists' in Africa," *Patterns of Prejudice* 1(1), 1967, pp. 29-30。
- 8 例えば、Jodi Dean, "Anti-Communism is all around us," *Praktyka Teoretyczna* 1(31), 2019。ここで著者は、近年の「反共主義」が進んで、「共産主義に反対する」意味を超えて、単に右派勢力が自己正統化し、支持を集める道具と化している事を強調している。
- 9 「반공 (反共)」、한국학중앙연구원 『한국민족문화대백과사전』 (한국학중앙연구원, 2022年)、<http://encykorea.aks.ac.kr/> (最終確認 2022年8月12日)。
- 10 Dean, "Anti-Communism is all around us," pp. 20-22.
- 11 Vincent Bevins, *The Jakarta Method: Washington's Anticommunist Crusade and the Mass Murder Program that Shaped Our World* (Public Affairs, 2020).
- 12 Paolo Acanfora, "Anticommunism and the sacralization of politics in christian democratic culture: a contribution," *Startseite* 6, 2011.
- 13 Long S. Le, "Exploring the Function of the Anti-communist Ideology and Identity in the Vietnamese American Diasporic Community," *Journal of Southeast Asian American Education and Advancement*: 6(1), 2011, pp. 1-25.
- 14 Janit Feangfu, "Pro-American, Anti-Communist Propaganda, Stupidification, and Thai Identity in Two Cold War Novellas," *Diogenes*. May 2022, pp. 1-13.
- 15 Chengqiu Wu, *The Discursive Construction of Taiwanese National Identity*, Dissertation submitted to the faculty of the Virginia Polytechnic Institute and State, 2007.
- 16 Stefano Luconi, "Anticommunism, Americanization, and Ethnic Identity: Italian Americans and the 1948 Parliamentary Elections in Italy," *The Historian* 62(2), Winter 2000, pp. 285-302.
- 17 Chad Alan Goldberg, "Haunted by the Specter of Communism: Collective Identity and Resource Mobilization in the Demise of the Workers Alliance of America," *Theory and Society*, 32(5/6), December 2003, pp. 725-773.
- 18 Elisa Kriza, "Redefining the Outsider: Anti-Communist Narratives and the Student Massacre in Tlatelolco (1968)," Christian Gerlach and Clemens Six eds., *The Palgrave Handbook of Anti-Communist Persecutions* (Palgrave, 2020).
- 19 Dong-Choon Kim, "How Anti-Communism Disrupted Decolonization: South Korea's State Building under US Patronage," Christian Gerlach and Clemens Six eds., *The Palgrave Handbook of Anti-Communist Persecutions*. 同じ著者の関連した論文として、Dong-Choon Kim,

- “The social grounds of anticommunism in South Korea-crisis of the ruling class and anticommunist reaction,” *Asian Journal of German and European Studies* 2(1), 2017, pp. 1-25, をも参照の事。
- 20 Kwang-Yeong Shin, “The trajectory of anti-communism in South Korea,” *Asian Journal of German and European Studies* Asian 2(3), 2017, pp. 1-10, 等。
- 21 Oh, Il-Whan, “Anticommunism and the National Identity of Korea in the Contemporary Era: With a Special Focus on the USAMGIK and Syngman Rhee Government Periods,” *The Review of Korean Studies* 4(3), 2011, pp. 61-100.
- 22 本稿においては、この「反共主義」が韓国の民主主義の発展に対して果たした役割については詳述しない。
- 23 ウィリアム・バーニーについては、Samuel Marquis, *Soldiers of Freedom: The WWII Story of Patton's Panthers and the Edelweiss Pirates* (Mount Sopris Publishing, 2020) に詳しい。
- 24 『朝鮮日報』1968年11月23日。また同氏の韓国来訪については、『中央日報』1968年11月23日、をも参照。なお、本稿においては特に断りのない限り、朝鮮日報の記事については、조선일보「지면보기」、http://archive.chosun.com/pdf/i_service/index_new_s.jsp (最終確認 2022年8月12日)、また中央日報の記事については、The JoongAng、<https://www.joongang.co.kr/article/> (最終確認 2022年8月15日) に拠っている。
- 25 Pierre Abramovici, “The World Anti-Communist League: Origins, Structures and Activities,” Luc Dongen, Stéphanie Roulin and Giles Scott-Smith eds., *Transnational Anti-Communism and the Cold War* (Palgrave Macmillan, 2014), pp. 113-129.
- 26 Victor Hsu, “Pacific Destinies: The Asian People’s Anti-Communist League and the Anti-Communist Struggle in the Asia-Pacific,” MA thesis submitted to Columbia University, 2016, <https://worldhistory.columbia.edu/content/pacific-destinies-asian-peoples-anti-communist-league-1953-1962-and-anti-communist-struggle> (最終確認 2022年8月12日)。
- 27 「アジア反共連盟」については、蒋介石と李承晩の間で主導権争いも存在した。왕은미「아시아 민족반공연맹의 주도권을 둘러싼 한국과 중화민국의 갈등과 대립 (1953-1956)」、『아세아연구』56(3), 2013年, pp. 155-19.
- 28 例えば, 이용수「해방이후 초등학교의 교육개혁운동과 반공교육의 전개과정」, 『교육사회학연구』12(2), 2002年, pp. 1-18, 최성광「박정희 시대 국가주의 교육이념의 형성과 비판적 고찰」, 『학습자중심교과교육연구』21(3), 2021年2月, pp. 143-163, 안경식「한국전쟁기 임시수도 부산지역의 피난학교 연구」, 『교육사상연구』23(3), 2019年12月, pp.315-350, 이순옥「한국전쟁기 전시독本の 형성 기반과 논리」, 『한국문학논총』58, 2011年8月, pp. 423-452.
- 29 対して、63年の第二次教育課程においては、反共教育に関わる内容は、知識中心の内容が依然として一般科目で教えられたのに対し、その内面化と実践においては、特設科目である「正しい生活 (바른생활)」が設置された。이용수「해방이후 초등학교의 교육개혁운동과 반공교육의 전개과정」, p. 9.
- 30 『反共読本』について詳しくは、次の論文を参照の事。박형준「전후『반공독本』의 헤게모니 전략과 사회문화적 함의」, 『한국문학논총』79, 2018年, pp. 457-484.
- 31 「뽕쟁이」。日本語の「アカ」という表現より、更に貶めたニュアンスを有する語である。
- 32 빛아카이브, 한국학술정보『반공독本 1 (우리의 고전과 옛 교과서 629 권, 546)』(한국학술정보, 2021年), P.1. 同書は, 한국교육문화협회『반공독本 1』(박문출판사, 1954年)の復刻である。なお, この『반공독本』1~6の全てには, 同じ, 「교수지침」がついている。詳しくは, 박형준「전후『반공독本』의 헤게모니 전략과 사회문화적 함의」。
- 33 공산권문제연구소『승공계몽자료집』上・下(樹文閣, 1972年)。
- 34 この論理的な建付けは、1980年代に全斗煥政権が行った「克日運動」と極めて類似している。そこでは「日本に克つ為には日本を知らなければならぬ」というロジックが用いられた。この点については、取り急ぎ、木村幹『歴史認識はどう語られてきたか』(千倉書房, 2020年)。
- 35 政治的主導権をどの勢力が握っているかを大まかな基準にした。例えば、1980年の初頭は体制的には第四共和国期に当たるが、実際の政治的権限は1979年12月の所謂「肅軍クーデタ」により全斗煥を中心とする「新軍部」勢力が握り、言論統制も行っている為に、「第五共和国期」に含めている。
- 36 허문영·권오국『통일교육: 과거·현재·미래』(통일연구원, 2011年)。
- 37 徐正敏「小学3年生の私が授業で描いた『反共ポスター』: 韓国の反共教育世代の胸に深く刻まれたレッド・コンプレックス」, 『論座』2019年3月31日, <https://webronza.asahi.com/politics/articles/> (最終確認 2022年8月15日)。

- 38 「悪魔化」(demonization)については、以下の文献をも参照の事。Flinders, Matthew Vincent, Debating demonization: In defense of politics, politicians and political science,” *Contemporary Politics* 18(3), September 2012, Linn Normand, *Demonization in International Politics: A Barrier to Peace in the Israeli-Palestinian Conflict* (Palgrave Macmillan, 2016)。
- 39 전두환 『전두환 회고록 3: 황야에 서다 (1988-현재)』(자작나무숲, 2017年), pp. 30-31。
- 40 최종희 『대구경북의 사회학』(오월의봄, 2020年), p.3。
- 41 김상숙 『10월 항쟁: 1946년 10월 대구, 봉인된 시간 속으로』(돌베개, 2016年)。
- 42 전두환 『전두환 회고록 3』の各所。
- 43 전두환 『전두환 회고록 2: 청와대 시절 (1980-1988)』(자작나무숲, 2017年)。
- 44 この点については、全斗煥の評伝として、近日中に出版予定の著作にて論じることとする。

Anti-communism as identity and ideology? : A historical experience in Korea and International society under the Cold War

KIMURA Kan*

Abstract

During the Cold War, anticommunism was influential in international society. Today, this ideology has sometimes been strongly criticized, as it was used to legitimize authoritarian regimes and oppress democratization movements.

However, this does not mean that the ideology did not play an important role in any society. This study explores the roles of anticommunism in international society during the Cold War using South Korean experiences as the main case.

As a result of analysis, this study finds that the fact that anticommunism did not have deep ideological insights does not mean it did not have any deep impact on society. In particular, in newly independent countries, where people often had difficulties defining their nation, the ideology was sometimes used as a border between the nation and outsiders.

In South Korea, which was under threat from North Korea, people needed their national identity to be distinguished from their communist counterpart. Being anticommunists and involving themselves in anticommunism activities was one of the easiest ways for people to show loyalty to their national identity. If the border between a nation and outsiders was purely between the people involved in independence movements and collaborators in colonial rule, it would have been impossible for the latter to get additional proof as members of the nation after independence. However, if the border between nation and outsiders was also constructed between communists and anticommunists, even collaborators in colonial

* Professor, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University.

rule could get their additional proof as legitimate members of their nation.

This is why anticommunism attracted so many people in newly independent nations, such as South Korea, during the Cold War, even though it did not have any deep ideological and philosophical content as communism did.